

【林論文へのコメント】

読みのつまずきと認知能力との関連

——読みの力の詳細なテストとWISC-IVの相関分析から——

梅 田 真 理

今回の林氏の研究は、2019年の「読みの『原因チェックテスト』」の開発に関する自身の研究がベースにある。この研究では、専門家によるスクリーニングテストや検査の前に、まず学級担任が子どもの読みのつまずきについて簡易にアセスメントができ、その結果を学級での教科指導等に活かすことのできるチェックテストの開発が行われた。この研究が行われた背景には、我が国の特別支援教育における課題がある。

一つは、「教員の専門性」である。平成19年から始まった特別支援教育は社会に浸透し、特別支援学級や通級指導教室の設置数は年々増加している。一方で、指導する教員の養成は追いつかない状況であり、どの自治体でも「教員の専門性向上」が課題となっている。平成29年に全国特別支援学級・通級指導教室設置校長会が行った通級による指導の状況に関する全国調査によれば、回答のあった967校（小・中学校）中、配置された正規教員における特別支援学校教諭免許を保有率は44.8%であった。これは同年の特別支援学級担任の保有率30.8%を上回るが、半数以下であり十分であるとは言えない。また、「求める専門性」に関しては「障害特性等の実態把握とアセスメントスキル」との回答が27.3%と最も多い状況であった。

もう一つは、「学習障害についての判断の難しさ」である。学習障害のある子どもは基本的には行動上の問題はなく、対人関係においても問題はない。つまり「目立たない」のである。しかし、林氏も述べているように、読み書きは学習の基本であり、そのつまずきは学習全般に影響を及ぼす。このことの重要性が、十分認知されていない状況にある。確かに我が国で学習障害の診断のできる医師は多くはないだろう。しかし、本来は診断を待つ

て支援を始めるのではなく、つまずきに気づいたときにアセスメントを行って必要な支援を始め、学習への影響を少しでも小さくすることが学校の役割ではないだろうか。

今回の林氏の研究は、前回の研究で開発された「読みの『原因チェックテスト』」とWISC-IVの相関関係を明らかにしたものである。チェックテストの示す各プロセスとWISC-IVの得点の関係を詳細に検討し、読み困難の背景にある認知特性を分析している。結果として、チェックテストのプロセスはWISC-IVの得点と強い相関関係を示すものもあり、その有効性が明らかとなったと言える。また、考察の中では、低学年においては言語推理や概念形成の力が単語や文の意味理解に関与している可能性があるが、高学年ではワーキングメモリーが読字から文理解に至るまでの一連の読みのプロセスに関与することが示唆されており、読み書きの学習が進むに従って関連する認知特性にも変化があることが示されている。このことは、「読み」は学習全般の基礎となりつつその範囲を広げ、より高次な機能を獲得していくことを示している。つまり、早い段階での気づきや支援がなければ、与えるダメージは大きいということである。

今回の研究は、本来であれば一昨年の研究を学校現場での指導に結びつける内容であったのではないだろうか。コロナ禍の中、その方向性を修正しながら研究をまとめられたことに敬意を表するとともに、ぜひ今後チェックテストが学校で活用されるよう研究を継続していただきたいと強く願う。

【文献】

全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会
(2018): 全国調査報告書.